
ひかりの声が聞こえる

平凡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひかりの声が聞こえる

【Nコード】

N0792X

【作者名】

平凡

【あらすじ】

電車の事故により、特殊な病気を患った鷹霧と川口という少年2人の話。

雑談

『2030年あたりから、「空想上の病」とされている数々の病に非常に似た症状の報告がきこえるが、日本政府、及び国際保健機関は無視を続けている。』

学校からの帰り道の、長いくせにゆるい坂道を横ぎる交差点で、
鷹霧優薫は、友達よつやの四谷と、「謎の病」とかいふサブカル本を読んでいた。

メモライズ「不死病ってこれ、すげえな。」

あるページで四谷が言う。

メモライズ「不死病？・・・強いショックを受ける事で・・・んーと、いち、じゅう、ひゃく・・・1千万人に一人の割合で発病。寿命が飛躍的に伸び、何をしてても老衰（約3000歳前後）まで死なない・・・うん、すげえ。」

この文を読みながら、鷹霧は、おそらく、この病気になりたいやつとなりたくないやつは、ぱっきり分かれるだろうな、と思った。

「ヤサはこれ、なりたい？」

四谷に訊かれ、「ぱっきり分かれる」とか思ったくせに、意外と答えを出すのに苦戦する。

昔の夢は「ふろうふし」だったのに。

音楽を聴きながら

北川つばめは音楽を聴いていた。S M A Pを聴いていた。ゴロちゃんの声に自分の声をのせる。鼻歌ってやつ。

「古いね。」って言われる。「ゴロちゃんって正直微妙じゃない？」とも。

そう言われちゃうと、「そうなのかな」と一瞬たりとも思っちゃう自分が、昔から嫌で嫌でしょうがなかった。

そんな時、私は決まって空手の型をする。無我夢中で、拳を前に突き出す。

隣で5組の四谷と鷹霧が何か本を読みながらしゃべっている。えらく興奮している。

「これはすごい。欲しい。」

とかなんとか四谷は言い、あわてて鷹霧が、「え、どれどれ」とか言っている。しばらく。

なんかガキみたい。そう思いつつも、耳はもはやゴロちゃんよりもそちらに傾いていた。

「・・・心読病^{ノイズ}。あらゆる人の心の中を読むことができる。強いショックにより発病。又、その際につけていた物を事後に装着した時のみ発病する場合もある。5千万人に一人の割合で発病する。」

まずつばめの脳にひらめいたのは「えっ、先輩の好きな人わかるじゃん!」やつらは「あいつの好きなやつとか一瞬でわかるじゃん!」とか言ってる。げ、八割おんなじ。

まったく。『全国統一中学生テスト2年の部』の全国4位がなにやってんだか。そろそろ行こうとしたところで考えた。

鷹霧優薫。あいつはこの学校でおそらく最も頭がいい。

馬鹿

結局、なにも答えられないまま、家についてしまった。呆然としながら廊下を歩く。

鷹霧は、3年前にこのマンションに引っ越してきた。札幌のなかでごちゃごちゃ動くのは嫌いだった。

それでも親は北区から豊平区に引っ越すと言った。父がなだめ役だったのだが、俺が小4のときから行方不明になったのをスイッチに、元から親バカ・・・いやバカ親だった母が

「お勉強ババア」に突然変異メタモルフォーゼしたのだった。

「だって南高が近いじゃない。」

知るかボケと思った。というかはっきりと口に出した。

で、この有様だよ。とちらりと窓を見る。

去年起こったインド洋沖大震災で、この札幌市で一番高級なマンションは、あっけなく耐震基準に引っかかったのであった。

その工事で、朝から晩まで雑音がひどい。

いまやその茶色い外見は、くすんだようにしか見えなかった。

そんな鬱な気分で、412号室についた。鬱というにはおおげさか。

一瞬でひとりぼっち

通学路に歩道は無かった。とぼとぼと、つばめは道路の白線の上を、落ちないように歩いていた。

つばめの通学路に、同じクラスのひとは他に1人しかいない。小学校が微妙な位置にあり、つばめとその子だけが切り離されたのであった。よって、いつも1人で帰っていた。

「今度遊ぼうね!」と、卒業式でつばめに言ったやつは、スーパーで会っても、ぴくり、とガキでもわかる引きつった愛想笑いをして、あの日の笑顔もなしにその日発売の週間少女漫画雑誌に目を戻した。袋の中の卵のパックが、かちやりと音をたてた。

小名木文房具店という、なにか買うたびに消しゴムをおまける店を越えたあたりで、対向車線から、自転車が坂をのぼってきた。
あいつだ。

黒石健斗。つぶらな、どこを見ているかわからない目。野球帽をかぶっていた。彼がただ一人の。噂の。あいつだ。

彼は、一瞬でつばめの横を通過した。赤いスポーツタイプの自転車に乗っていた。

Cross A

鷹霧は今日2軒目の塾のまっさい中だった。こんな感じで、毎日2軒の塾をはしごするのが日課だった。

7..30に二次会は終わる。今は7..05分だ。ちくしょう、この約30分間が長いんだよ。ーそう思うのも日課の1つになっていた。

ぼんやりとベージュ色の壁をながめた。

三次会は8..30からで、それまでに3駅分の移動、そして夕食をとらなければいけなかった。木曜はフィレオ・フィッシュとジンジャーエールのセットと決めていた。

イヤフォンからはずつとアジカンがリズムを刻んでいる。

そして地下鉄は、レーザーガンのような音をたてながら、定時に来た。おまえも日課をこなす仲間だよ、とこっそり、しかしいつも彼にー地下鉄に愚痴をいった。アホじゃないかな、と思いながら。座れるかな、と期待する。

そして鷹霧は、栄町行きの東豊線に乗った。

大通でおりるんだよな、いつものことを再確認した。

しかし鷹霧の日常は、ぐんにやりと曲がることになった。たとえばなら、反比例のグラフのように。

Cross B

つばめは、なんとなく暖色と寒色の服を交互に着る、という癖があった。絶対「赤からオレンジ」ということはなかった。最悪、「オレンジから黒、黒から水色」

で、とりあえず重ねることはなかった。

「つばめの服って落ち着きがない」と言われたけれども、そんなセリフ私の耳に入っていない。

ただ、暖色代表赤と、寒色代表の青を混ぜた紫っていう色はどっちなんだよう、と少しだけ毎日苛ついていた。

今日は5日だった。11月5日。

三月にあるライブのチケットが、確か今日解禁のはず。けれどもそれを買うには札幌までいかないといけなかった。

「めんどくさいなあ」

そうつぶやきつつも、しっかりとすでに出かける準備はしていた。7時もまわっていたので、食料を調達しないといけなかった。親は、父は単身赴任で、母は習字教室だそうだ。

一なんか、さびしっ。と言ってから、なにいつちゃってんの。と苦笑いした。

それからつばめが福住駅についたのは30分後だった。遠いんだよ!と舌打ちした。

ここは終点なので、電車を待つことは少なかった。いまはその少ない1回だ。

駅は気持ち悪いぐらい静かだったけど、それを撃ち抜くかのよう電子音になり、地下鉄東豊線、栄町行きは来た。

7時42分発だ。ここから札幌までざっと15分。

しかし大幅に札幌につくのは遅れる事となった。

追加

地下鉄東豊線栄町行きが月寒中央駅で事故をおこしたのは11月5日の7時44分のことであった。

「んー、あいかわらずジャストだなあ。」

と、林は苦笑いした。

「おい、君」と笑顔で、電車につつこんだ男に声をかける。一生きてんだろ？おまえ。

まあ今はそれどころじゃないや、ときよろきよする。乗客は全員降りているはずだ。

ああ、いたいた。ふふふ、君はこんなときでもMUSICか。それに比べてそっちは割とミーハーだね。好きになるのはもっぱらくだらないアイドルでしょ。

さて、と。どう声をかければいいかなあ？

わからないし、うまくいく、という確信があったので、ストレートに言おう。

近づく、明らかに彼女は警戒していた。近づく、橙の、彼女にしてはゴツイヘッドフォンを外した。

「・・・君はいま、とっても困惑してるだろ？」

「・・・そりゃ誰かわからない大人に声かけられたら、誰でも困惑しますよ。きっと。」

強がっちゃって。でも気をつけないと。実際彼女が暴走したら全市2位の實力で叩きのめされてしまう。

少しゾツとした。

「・・・そうゆうつまらない話じゃなくてさ。・・・例えば、ぼくの名前をあててごらん？あたったらファンタ1本おごるけど。」

俺の名前は、林です。心のなかで、割とゆっくりと言う。さあ、どうだい？

「・・・」

「そのヘッドフォンをつけてみな。」

「ごそごそと彼女はヘッドフォンをつけて、間髪いれずに言った。

「……林さん、ですか？」

くつくつく、と笑いながら、正解だよ。と告げた。

「やっぱりか。」と彼女はいった。ため息つきで。なんか僕が悪者みたいじゃないか。

……そうだよ。君は残念ながら心読者ノイザーになったんだ。と心のかでヤケクソ気味に言った。

そんなにわかりやすく青ざめないでよ、こっちが困るから。

「ちよつとこっちに来てくれる？……その病気の事で。」という、彼女は「いや、でも家が……」と拒否した。

「大丈夫。僕の予想だと、今日は家にお母さんは帰ってこない。なぜわかるかって？僕は未来予知者だからね。フンドロイド

「もう1人いるんだよ。患者が今日は。」

そう言うと、「意外と多いんですね。」と、彼女はポツリと言った。

混乱

「『この男は何を言っているのだ』っておもってるでしょ。」と、名前は知らないが、なんとなく顔は見たことのある奴が、顎あご

をウインドブレーカーに隠しながら言った。

はい、そうですとも。鷹霧はカフェオレ色のジャンバーのポケットに手をつっこみながら考えた。一こいつらは何者だ？

「ああごめん。僕は林。この子は・・・」

「北川です。」おのおの自己紹介され、しょうがないので鷹霧もしようとする、

「めんどいならいいよ、鷹霧君。」

何故おれの名前を知っている。

「そりゃ警戒するよね」と、俺の心を読んだかのように、黒縁眼鏡の知らない男が言う。

はつきり言っちゃうとね、と。「僕は、ある程度先の未来のことがわかる、『不可視現実病』^{ファスト}、簡単に言っちゃえば未来予知ができる、未来予知者なんだ。」^{アンドロイド}

え。とまぬけな声を思わず出してしまう。なんじゃそりゃ。

「信じらんないよね。」と、へにゃへにゃため息するシーンは映画で何回も見た。そしてそのあと、そいつはこう言うんだ。

「けれども、」ほらね、やっぱり。

今度こそずばつと言います、と勝手に宣言してから、男は「君は、」とゆっくり言う。ごくり、と息を飲む。

「君は、不死病^{メモライズ}っていう病気に、ていうか能力をつけちゃったっばいんだよ。僕の未来だと。」

少しだけ睨む。

「はつきり言って」「信頼できない。」最後の部分はヘッドフォン野郎とハモった。ヘッドフォン野郎が「『ヘッドフォン野郎』は

ひどい。」と、少し涙目でぶつぶつ言ったが、今回はシカト。

あああああああああっ！！なんなんだよこいつらはっ！
！

子供

学校で見る温和な鷹霧が、あきらかに殺気をたてていた。なんていうか緑のオーラっぽい。

「君、いつもの退屈な生活にうんざりしてるだろう。」林がゆらりと言う。鷹霧は眉をひそめた。

たしかにそうだけどさあ。と、心のなかでいったようだ。へえ、そうなんだ。

「このビビリがっ!!」

「はあ!？」鷹霧ははつきりと声にだしていった。気分的には鷹霧の味方だ。今このタイミングで言うか!？それ。

と、突如「ぐう」と漫画的表現なおなかの音がする。林だ。今このタイミングで鳴るか!？それ。

まあ、おなかもすいたし、座りながら話そうよ。とのんきに林はいう。確かに今までずっと駅構内で立ちっぱなしでつばめも疲れていた。だいいち真横は事故現場である。渋々、というかんじで鷹霧も同意する。

「どこがいい？」

だからあんたはのんきすぎるんだよっ!!ガキかっ!!

結局、希望も特になかったので、そこらへんの喫茶店に入る。

自分と鷹霧はジンジャーエールで、林はオレنجジュースだ。今の子供はカッコいいものの飲むねえ、と林が苦笑いする。

「それで、だ。どうすんの？」まだドリンクも来てないのに。

「親が心配します。」と、まっとうな理由をつけて鷹霧が断る。

「きみの両親は・・・もとい母親は今日、東京に演劇を見にいくはずだ。」勝ち誇ったように林が言う。案の定、なんでそれを、と焦っているようだ。顔にでてる。

焦る鷹霧か。いま私めずらしいもん見たわ。

sound

「ていうか、なんで僕、ビビり扱いなんですか。」

静かに、しかししつかりと鷹霧は言った。どうやらさっきの林の発言にややご立腹のようだ。

「だって、現状に満足してないのに、そっから逃げてるってことは・
・ビビりでしょう？」

でも僕もあんまりひとのこと言えないんだけどね、と苦々しげに林はいった。

鷹霧はしたくちびるを噛んでいた。

ドリンクがきた。

けれども、気まずい間は続いて。

つばめは無意識のうちにおしぼりをいじくっていた。だれかどうにかして。

今日。

ひとりごとのように林は言った。形容詞的には「寂しい」感じだ。林はどこか遠くを見ながら言う。

飛び込んだやつがいただろ？ あいつはね、僕の患者のひとりなんだよ。

そこで彼はオレンジジュースを飲んだ。氷が、からんと音をたてる。

重いってのはこんな感じか。と、鷹霧までのんきなことをいいだす。

目の前のジンジャーエールがしゅわしゅわいっている。

彼のなまえはね、黒石護君。くろいしまもろかっこいい子でね、タレントやっただの。

過去形かよ。ヘッドフォンから鷹霧のこころのこえがきこえる。ちよっと待って。黒石って今あんたいった？

まぬけ

つい2、3時間前に読んでいた本の話がリアルになるなんて、予想もしていなかった。この世界というものはずいぶん奇蹟とかいうやつがおこりやすいな、と鷹霧は思った。というか、半ば呆れていた。だいたい、予想できるやつなんているか？・・・おれの目の前でオレンジジュースをすすってるやつを除いて。

そいつは黒石の、黒石護の話の続きをした。一遠い目で。視線はちらちらとゆれていた。あきれているようにも、怒っているようにもみえた。

「彼がね、僕の患者さんになったのは、6年前のこと。ぼくはまだ23歳だったなあ。・・・意外とふけてるでしょ。びっくりした？」

そうゆうのいいからはやくつづけろ。29歳としての態度で。

「彼はね、卒業式ですっころんで発病することになってたんだよね。」

いやあ、見事なマヌケっぷりだったよ、と奴はにやにやした。というか、何の病気だ？

「安心して、彼はまだ死んじやいない。・・・確実に。」

ごとり、と音がした。隣をみると、北川がヘッドフォンをおいている。

「・・・彼も、不死者くメモライザだ。」

おそろいだねえ、と林が軽く言う。口笛まで吹きそうだ。

頼む、少し黙ってくれ。

不死者くメモライザ>といわれて、背中にいやな汗をかいているというのは、明らかに動揺している証拠だった。一おれはこの林とかいうちんちくりんな奴を信じるのか？・・・どうかしてる。

急にとりの北川が、苦々しい顔でいう。

「黒石護さんは・・・黒石護さんには『健斗』という弟はいますか」

んー、とのんきにうなつた林は、いるよ。とポケットからどんぐりが落ちたように云った。そのうえ、「たしか君の・・・ええと北川さんの同級生でしょ」ともいった。

ため息をついた。ふたりとも。

そして俺は、残っていたジンジャーエールを一気に、ストローをつかわずにのみほした。

覚悟をきめた。

黒石家の庭は綺麗だろうか

黒石健斗にかかわってはいけない。そう思った。

黒石健斗はいつでも中2だというのに純白のブリーフで（男子が言うにはで、私は見てない）、すぐくわかりやすいマザコンだ。そして何かつぶやいている。

その内容は、つい5秒前に覚えた言葉か、中2病的な技の名前だった。

・・・でも・・・知ってる。黒石健斗が、確かに「きのうの『音楽基地』見たっ?！」って3年ぐらい前に言ってた。

どうしよう。このつぶやきが、突如として「お兄ちゃん」とかいはじめたら泣いてしまいそうでふるえる。

俺は、北川は小3から人前では泣かなくなっていた。涙目で止まりし、涙目でとめる。のにもかかわらず、だ。

林がぼんやりと言う。

「黒石護が自殺未遂を仕掛けたのはこれで6・・・いや7回目なんだよね。でそれで治療費とかが結構やっぱりかかるらしいよ。」

鷹霧君はこうなっている現状を知っているだろうか。今はトイレに行っているが。

彼はトイレに行く寸前、

「じゃああなたを信じてみます。」

といってトイレに行った。

訳もなく、ヘアピンを手でもてあそんでいた。

店の奥にあるトイレから鷹霧がでてきた。

「じゃあ行こうか。」

林がレジへ向かった。なんとなく気まずくて、鷹霧の方を盗み見したら、目があった。

顔

店から出て、果てしなく続くのではないか、というほどの長い、そしてまっすぐな地下街を深夜に歩いていた。男三人が約3m間隔で列をなしていた。かなりstrangeな光景であっただろう。

いい加減夜である。地下街はシャッターがおり、人は一人で無表情で歩いていた。この人達は何を考えているのだろうか、と3m先をゆく北川を見るが、ノーリアクションだ。そもそもヘッドホンをしていない。

シャッターとシャッターのすきまほどの、細い細い地上に出るための階段があった。少しひんやりとした空気が流れている。

ずいぶん急な階段だ。思わず無言になる。・・・いや、正確には店をでてから一言もしゃべっていない。

いざ登りはじめると膝がわらう。ふと上方を見上げると林が出口で立ち止まっていた。驚く事に顔が笑っていない。

今にやにやしないでいつするんだよ！とひとりでイラつとする。

風は冷たかったが、空は澄んでいて、冬が近いことを匂わす。

駐車場はそこから2分ほどで、真っ赤なスポーツカーが一台だけ停まっている。・・・冗談だろ？

いまさら林がにやにやしている。

なんでついて来たんだろ、俺。

GO!

つばめは目を見開いた。目の前には真っ赤なスポーツカー。ちよっ、ちよっと待って？あたしこれからこの高そうな車に乗るの！？

「まあ乗ってよ。」

林はにやにやしながら言う。どうやら心の中では「どやどやどやどや……」と流れているようだ。

……別に自慢してもいいけど事故だけはおこしてくれぬな、と思いつつその真っ赤なドアに触れた。が、あわてて手をひっこめる。

そうこうしているうちに、あっさりと鷹霧は車に乗っている、というのを乱暴に閉まるドアの音で知った。え、ためらいとかない訳？

二人は後部座席に乗って、それぞれ窓の外を見ていた。

ばん。と所有者である林も乱暴にドアを閉めて。

「しゅっぱーっ！」

と林一人だけテンションを上げて車は走りだした。

その訳を

どれくらいたったであろう。車は住宅街を走っていた。車の中は場違いにも、the telephonesでノリノリだった。車の中の空気は凍りついている。

そんな空気の中、おれは「KYって何年前の言葉だっけ」とぼんやり考えていた。

そして、なんでおれはこの男を信用し、その車の中にいるのだろう、と思った。普通の人なら、鷹霧のような反応だろう。

「あと15分ぐらいでつくよ。」

林が唐突に言ったので、おれは悲鳴をあげそうになった。

車は、ややくすんだビルの前で止まった。「土佐田ビル」と書いてあるようだ。

「こん中に僕の病院がある訳よ。」

え、病院だったの？と一瞬思うが、本人がそう言っているのでそうゆう事にしとこう、と鷹霧は思った。正確には、ただ、めんどくさかった。

隣を見ると、北川も微妙な顔をしていた。

三人はビルの中に入った。中もホコリくさい。

三階が林の「病院」らしかった。ただ、雰囲気は「病院」というより、ただ単に応接室である。

適当に革のソファーに座る。ん！？

「ああごめん。ほら、おととい雨だったでしょ。」

そう言っただけで林は鷹霧の尻の下から靴下を救出した。もはや苦笑いだ。北川は隣でずっと耳にヘッドフォンを押し付けるようにしてうずくまっている。指間からもれるヘッドフォンのオレンジ。

林がカフェオレを持って来たタイミングで、声を出す。

「約束どうり、この病氣のことを詳しく教えてください。」

まあ、約束なんかしてないんだけどね、と林がブツブツ言っているのは聞こえていたが、「自分に都合の悪いことは聞かなかったことにする」というモットーの元、却下する。

珍しく林が困っている。珍しくと言っても、まだ会って数時間だが。

「そこ、めんどくさがらないで下さいよ。」

がばっと北川が起き上がり、言う。まっすぐに林を睨んでいる。

「だって話すこと多いからさあ。」

知るかボケ。いいかげん怒るぞ。

熟した後は腐るだけ

ぼりぼりと頭をかきながら、林はたった今自分で運んできたカフェオレを一気に飲むと、部屋の奥の方に消えた。つばめはほっ、と息をはいた。疲れた。

それに合わせるかのようなタイミングで、鳩時計が鳴く。0..00。鷹霧はぼけっと、そしてじいっとカフェオレを見ている。どうやら東京に演劇を観に行った親を心配しているらしい。

えらいわねえ。彼は今までで何回こう言われたんだろう。私の何倍だろう。

林が戻ってきた。

「Aの話とBの話、どっちがいい？」

「AもBも何も、選べと言われても困ります。」

鷹霧が至極真つ当な抗議をする。だけでも、さ。

「Aはクスリの話。Bは敵の話。」

私はココロが読めるってことを忘れないでほしいな。

ん、いや待てよ？あいつの神的な脳だ、さりげなく私を避けようとしたのか？え、ひょっとして・・・嫌われてる？

北川つばめ。名前は割と簡単で、16画しかないのに、やたらと物事を複雑に考えようとする。その上中途半端。私の悪い癖だ。

会話は続いている。

「大したことないのは？」

「・・・クスリかなあ？・・・うん、クスリだね。じゃあクスリの話からしようか。」

そう一方的に言うと、林はポケットからフリスケケースのようなものを出した。

進化薬

林は割と真剣な顔をしていた。「お薬」の説明をねっとりと言う。

「この『お薬』はね、進化薬^{デイン}って名づけられてる。飲むとね、あ、直で飲んでも、水で飲んでも、お茶でも牛乳でもいいんだけど、飲むと興奮作用が働いて、しばらくの間、病気を『悪化』させちゃうんだ。」

ま、簡単に言えば「強くなる。」ってこと。とぼそりと付け加えた。確かに俺たちの「病気」は、「能力」とか「魔法」と言い換えても別に問題は無いよな、と鷹霧は思った。

ただ、彼は、林は「強くなる」なんて物騒なことを言った。なにかと戦うわけ？

ちよい待て。そうゆうドラクエもびっくりな展開はやめてくれ。体育は3だ。

「あ、そうそう。いい忘れたけど、進化薬^{デイン}って基本ワルいおクスリだから、君達はダメだよ。飲みすぎると死んじゃうしね。」

と、一番最後にハートマークがつきそうな感じで林は言ったが、それ要するに麻薬とか覚醒剤と呼ばれてるもんじゃねえのか。だからあんた常になににやしてガキみたいな行動してんじゃないのか、俺はそんな奴の家だか拠点だか知らないけど、そんなところにいるのか、とスイカの種ほどの質アンド量の不安が積もる。

「で、こっからもっと危険なBの話なんだけど、」
ああもうどうにでもなれ。

嘘も方便

ヘッドホンを外す。こうゆういわゆる「心理戦」みたいのは得意じゃない。

真っ白な状態で受けて立とうじゃないのよ。かかってこい！

嘘嘘。大嘘。頼むから、こっから先の「Bの話」ってのを言わないでほしかった。実のことをいうと、つばめはずっと耳を塞いでいたかった。

でも林は言うんだ。悠長にカフェオレなんかすすりながら。

「それで、なんだけど。あ、Bの話ね？中学生を前に、主人公達を前に言うのもアレなんだけど。

・・・なかなかブラックな方々に追われてんのよ。僕。」

「・・・え?!」とあたかも鳩に豆鉄砲みたいなりアクション私今してるけど。

まあ、おクスリの事なのかな?と。納得できる捌け口があったちやうから怖い怖い。

「で、そのブラックな方々の正式名称ってのが・・・『世界希少精神病捜査機関』つつうやつ^{デイン}の日本支部で。」

お決まりのパターンだ。映画とか、ドラマとか。「メン・イン・ブラック」で例えればエディーマーフィー達があっちで、こっちはエイリアン。

鷹霧が思いっきり能面のような無の表情をしている。気を失わないか心配。

「で、なんでそんな物騒な方々に追われてるかと言いますと。・・・あ、進化薬^{デイン}は関係ないよ?」

え。。うっそだあ！

「軍隊ですか?」

真横から声。鷹霧だった。林が補足する。

「ビーング。そう。そいつらは、俺らをとっ捕まえて、戦争に使い

たいワケ。」

こめかみが動いたのが自分でもわかった。

あれ、日本ってこんなにこわい国だったわけ？

「でもってそいつらも」と鷹霧が汗をこぼしながら言ったところで。「患者さん?!」嘘であってほしい。なんか、もう泣きそう。

ニヤツと林が笑う。「いや、ちよっ、あんたソレ笑い事じゃないから。」思わず泣き声になる。

心臓が高鳴っていた。悪い意味で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0792x/>

ひかりの声が聞こえる

2012年1月4日03時51分発行